

## ポスターセッション

ポスターの概要は以下の通りです。(このうち、会報用に原稿が寄せられたポスターについては33ページ以降に掲載いたします。)

1. 盲学校の実践報告 ～豊かな生活を目指して～	新潟県立新潟盲学校 上田 淳一
新潟盲学校小学部2年生のWSさんについて、学校生活の一端を紹介します。WSさんの学校生活をどのように豊かなものにし、将来の豊かな生活へとつなげていけるのかということについて考えてみます。今、WSさんにとって学校という場が、安心で、楽しくて、刺激的で、友達がいて...、そんな魅力に満ちた世界であるということ。そのことがWSさんがこれから生き生きと豊かに生活していくための原動力となることでしょう。	
2. 筑波技術大学における盲ろう学生の教育・日常生活支援の研究 ～盲ろう学生の受け入れに向けて～	筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 岡本 明、佐藤 正幸 特殊教育総合研究所 教育支援研究部 中澤 恵江
筑波技術大学は、日本で唯一つの、視覚障害、聴覚障害のある学生だけのための高等教育機関であり、盲ろうの学生の受け入れも使命として担っている。しかし盲ろうは視覚・聴覚の障害が重複しただけのものではなく、単に両障害についての個別の知識や教育ノウハウだけでは十分な受け入れはできない。本学では、責任を持って受け入れができるようにするために、2年前から研究を行なっている。昨年度は大学に対する「提言」を行い、本年度以降も研究プロジェクトを継続し、多くの課題の解決に取り組んでいく。本ポスターセッションでは、その概要を報告する。	
3. Sさんのコミュニケーションについて	静岡県立藤枝養護学校 岡本 広美
Sさんは昨年度から知的障害養護学校中学部に編入してきた。しかし、その時は彼女から発信するコミュニケーション手段がほぼなく、受身の姿であった。昨年今年とSさんと一緒にサイン等使っていく中で、少しずつ獲得していくSさんの過程や現在の様子、また今後の課題を紹介したい。	

4. 盲ろう者生活実態調査報告	社会福祉法人全国盲ろう者協会 塩谷 治
<p>全国盲ろう者協会では、平成16年度に各都道府県における盲ろう者数の把握状況、及びもうろう福祉施策の実施状況を調査した。又、平成17年度には、平成7年度以来10年ぶりとなる盲ろう者生活実態調査を行った。各都道府県における調査では、推定数に近い実数を把握することができたほか、男女比、年齢分布等の実態も初めて明らかになった。生活実態調査では、時代に合わせて、携帯電話やパソコンの使用状況についても調査した。</p>	

<p>5. 感覚障害(視覚障害・聴覚障害)を重複している肢体不自由児童が、コミュニケーション手段としての文字を獲得していくための初期学習指導・実践報告 ～自作教材・教具でのやりとりを中心にして～</p>	長野県花田養護学校 中山 喜崇
<p>平成16～17年度、肢体不自由養護学校における2年間の実践報告。 対象の児童は現在小学部4年生。弱視・ろう。車いす使用。座位は安定していない。食事は経管(胃ろう手術)により摂取していたが、現在は経口摂取に切り替えている。 入学当初から、かなり細かなものを見ることができ、手の操作性も高かったので、視覚活用の積み重ねにより、将来的には文字盤の使用も可能ではないかと考えた。 主に自作教材の紹介と実践報告。</p>	

6. Dくんと3年半のかかわりを振り返って	福島県立西郷養護学校 星 視文
<p>Dくんは現在小学6年生、私とのかかわりも今年で4年目になる。最近のDくんは、「ねえねえ」(肩をトントン)と話しかけると、手をスツと出して、私の話を聞いてくれるようになってきた。Dくんと3年半のかかわりを振り返ってみると、人とやりとりをする素地づくりを目指してきたのではないかと感じている。そのような3年半のかかわりを、Dくんと交渉、因果関係の理解、遊びについて等、様々なエピソードを交えて紹介したい。</p>	

7. 指点字通訳者による感情表現の特徴	神奈川工科大学 松田 康広、磯村 恒 東京大学 佐久間 一郎、神保 泰彦、 小林 英津子、荒船 龍彦 横浜訓盲学院 三科 聡子
<p>我々は、盲ろう者とコミュニケーションする健常者が、より自然な抑揚で、感情のこもった指点字を打てるような打点教示支援システムを開発している。そこで、指点字通訳者が平静、喜び、悲しみ、怒りをどのように表現しているのか明らかにするために、実験を行なった。その結果、喜びはリズムカルに打点時間を短く、悲しみは包み込むように打点時間を長く、打点荷重を弱く、怒りは突き放すように打点荷重を強く打点されていた。</p>	

8. 盲ろうインターナショナル・アジア会議	社会福祉法人全国盲ろう者協会情報委員会 藤井 明美
<p>2006年1月にバングラデシュの首都ダッカにて開催された Dbl(盲ろうインターナショナル)第2回アジア大会の報告。アジア地域を中心として、18ヶ国から320名の参加(日本からは盲ろう当事者2名をふくんで7名)。Dblとは、盲ろう児・者を支援する、支援者や教育関係者、福祉関係者が集まって、福祉・教育・リハビリ等のテーマの下で議論や意見交換等を行うことを目的として活動している組織で、今回の会議も、全体会、分科会を通して、全体的に盲ろう児教育関係や福祉サービスの向上を考えることをテーマとした内容が目立った。</p>	

9. 盲ろう者が通所する作業所の実情に関する調査研究	特定非営利活動法人 東京盲ろう者友の会 前田 晃秀
<p>近年、盲ろう者友の会や盲ろう者個人が主体となって、作業所の設立に向けた機運が高まっている。「日中活動」と「人的支援」を同時に、かつ安定的に提供してくれる作業所は、コミュニケーションや情報入手、移動といった困難を有する盲ろう者にとって、QOLを向上させるための大きな役割を担っていると考えられる。</p> <p>本調査研究では、全国4カ所の盲ろう者が通所している作業所を訪問し、実情を把握するとともに、今後の作業所設立や運営の課題について検討した。</p>	

< 8月11日 >

実践報告「手探りで覚えた一本背負い～その背景～」

広島県立盲学校 田中貴美・三浦憲一 氏

(以下に、報告の概要を掲載いたします)

三浦憲一 氏

本日のテーマは、「人とのつながり」、つまり「盲ろう者の“LIFE”」という、生涯にわたって重要と考えることに焦点をあてて報告いたします。

このテーマのベースとなるものは、昨日からも話題となっております「コミュニケーション」にあると思います。

それでは、まず、人とコミュニケーションをとることがどのくらい緊張し、どのくらい勇気の要るものかを体験してみましょう！

ちょうど皆さんも朝早くまだ目覚めていないかもしれないので、一緒に体を動かしてみましょう。

(ルール: 実演しながら説明)

「名札をはずしてください」

「立ってください。移動が難しいと思われる方はその場にいらっしゃって結構です。」

「移動できる方は、いすを机の中に入れてください」(移動のため)。

「5人の人に自分の下の名前を指文字、指点字、手書き文字などを使って伝えてください。」

「最初に盲ろう者役をする人を決めます。盲ろう者役になった人は目をつむってくださいね。通訳の人は声を出さないでやります。では、ちょっとやってみます。」

「次に交代してやってみましょう。」

「というのを5人にやってみましょう」

「時間は10分間です。」

「用意、ドン！」

どうでしたか？人と話すことには、緊張したり勇気が要ったりしますよね。

でも、話せたら、何かしら優しい気持ちが生まれてきたような気がしませんか？

コミュニケーションとは、その人に、そして互いに合う、合わせるということですよね。そのことから、勇気や優しさが生まれてくるものだと思います。

本報告の主人公であるK君は、これまでも本研究会で報告してきたように、小学部5・6年生の2年間で指文字、指点字、触手話という現在の「話す“Talk”」のベースを身につけました。その様子について、もう一度簡単に振り返ってみたいと思います。(VTR放映)

「お母さんと話したい」「友だちや先生と直接話したい(いつも同じ通訳抜き)」という思いが強い子どもでした。私との関係が持て、信頼をおいてくれると、指文字、触手話等のコミュニケーション技術はすさまじい勢いで吸収していきました。

彼と私との出会いは、今から5年前、彼が小学部5年生でした。私はろう学校から盲学校のほうに転勤

して来ました。盲学校において初めて担任する子どもでした。とにかく、元気があって力が有り余っていました。休憩時間は、20分近くトランポリンを跳んだり、鬼ごっこをして校庭や体育館を走り回ったり、プロレスごっこをしたりと、動き回ってエネルギーを発散させていました。

盲学校の課題でもあると思うんですが、視覚に障害がある子どもたちは、どうしても動きが少なくなってしまう。だから、彼の動きにつきあえる友だちが当時は少なかったのです。この体力を無駄にしてはいけません！と思いました。

その当時、私はここにいらっしゃる中澤先生から「フランスにおいて、盲ろう者の柔道が盛んだ」という話を聞いたことがあります。そう考えると、本校にはとてもいい柔道場があるではないですか！また、教頭先生が柔道の師範でいらっしゃる。こうした物的、人的環境を見過ごす手はない！と考えました。

本人、保護者とも話をしました。即答で「お願いします」という事でした。

教頭先生は本来、授業をもってはいけません。しかし、相談をすると「時折アドバイスをしに行こう」と快く引き受けていただけました。やはり師範の血が騒いだのでしょうか。

そこから話がトントンと進んでいきました。

まず、柔道着です。これは、教頭先生の娘さんのお古をもらいました。なにしろ今後ものになるかどうか分かりませんので、私自身もあまりご家庭に負担をかけたくないという気持ちもありました。

まさかここまで進むとは...その当時夢にも思っていませんでした。

では、その当時の懐かしい様子をVTRでご覧ください。

(VTR: 藤田教頭先生の紹介と、柔道太郎(教材)の紹介)

とにかく、K君は当時から警察官になることが夢だったので、柔道を勧めるに際しても「警察官も柔道しとるよね！」という卑怯な勧誘でスタートしたわけです。

初めて柔道着を着て柔道場に立ったとき、とても嬉しそうな表情でした。どんなことが始まるんだろう？期待に胸膨らませた表情でした。

周りの先生方からもたくさんの励ましのことばをいただきました。柔道着を肩にかけて歩く彼に「がんばれ！柔道一直線！」と声をかけてくださいました。「うちの子どもも柔道をしとるんじゃけど、何か困ったことがあったら相談してね」という言葉もいただきました。そうしてみると結構何らかの形で柔道に関わっていらっしゃる先生方が本校にも多いんだなと思いました。

初めての練習で、私を投げ飛ばしたとき(投げ飛ばされてあげたんですが)、とてもびっくりした顔でした。また、自分が投げ飛ばされたときには、まだ受身が十分できないので、とても痛かったようで、これもまたびっくりした顔をしていました。あのときの顔は忘れられません。

初めの頃は、この週に1時間しかない練習の日が楽しみで楽しみで仕方ありませんでした。

普段は、私が練習相手ですが、思い切り投げ飛ばせて、普段の憂さ晴らしができたかもしれませんね。練習時間の後半部分には、乱取りという試合形式の練習方法も取り入れました。もともと負けん気の強い彼でしたので、必死になってくraitてきました。

練習を重ねるにつれ、みるみる間に強くなっていきました。藤田先生が、月に1・2度来られて練習相手になってくださいましたが、「藤田先生は強すぎておもしろくない！」とよく言っていました。

始めて3か月たった7月ごろ、少しずつ練習内容が深まってきました。練習の途中に「疲れた」と言って休みたがっても、私が「まだまだ！かかってこい！」という場面が増えてきました。

それに加えて、暑さが厳しくなるにつれ、本人のやる気もだんだん薄れてきました。「やめたい」ともらすこともあったり、藤田先生の前でも失礼な態度を見せることが出てきました。

しかし、やめたいという本人の訴えに、私は耳を貸しませんでした。私自身もずっと剣道をやってきたので、しんどくてやめたいという気持ちになるのは分からなくはないですが、そんな思いはだれしもするもので、ここでやめては彼自身にとって良くないと判断しました。

また、この柔道というスポーツを通して、同じ年代の同じ目標を持つ友達とつながりを広げていかせたいという思いを、私自身持っていたからです。

練習は深まっていきました。一本背負い、大外がり、小内がり、一つ一つの技の練習に加え、柔道場でのマナーや柔道着の着方、たたみ方など指導の内容も広がっていきましたが、その一つ一つを一生懸命身につけようという様子が見られるようになって来ました。

ここから私自身にもだんだんと欲が沸いてきました。つまり、試合に出ることを考え始めたのです。

藤田先生と相談をしました。技をひとつずつ磨いていくこと、そして基本である受身をしっかりと身につけさせること、まずこれを徹底していこうということになりました。

また、藤田先生の知り合いで彼の家の近くにある野坂道場についても話題に上るようになりました。

そして、中学部へ進路を決める際にも、引継ぎとして「柔道を続けさせる」ことを強く希望しました。それは、柔道が彼にとって『生涯スポーツ』として彼自身の生活に潤いをもたせるものとなってほしいと強く願っていたからです。この願いは、中学部に引き継がれました。道場での友だちとのつながり、試合についての友だちとのつながり、また昨年12月に大阪で行われた強化合宿において全国の同じ目的を持つ仲間とのつながり、様々なつながりが見られるようになったのです。

彼との小学部での最後の練習の日、中学部の体育の先生に審判をしてもらい、私と彼との試合を行いました。真剣勝負です。力も技も身につけてきている彼に、私自身押されっぱなしでした。

しかし、私も負けるわけにはいきません。私が投げようとしても、身をかかわしていく様子や、自分から積極的に教わった技をかけてくる様子。二人とも汗びっしょりになって試合を行いました。最後は、私が横四方固めという技でなんとか勝ちましたが、審判をなさっていた先生に「大人げない！」と言われるほどでした。そのくらい強くなってきた彼を嬉しく思いました。

私と彼との試合は、生涯この1試合と決めておりますので、彼がいかに強くなって「私には勝ったことが無い」ということになっております。

それでは、中学部から現在に至る様子について、田中がお話いたします。

田中 貴美 氏

中学部に入学してきました。

「柔道を続けさせる」という引き継ぎを受けて、週1時間ほど自立活動の時間を利用して柔道の練習を続けました。

このころにはすでに「自分は柔道をやっている」ということが大きな誇りとなっていました。日記にもよく柔道の話が出てきました。よく書かれていたのが「ぼくは強い」「N先生がよく負けて、ぼくが強くなってきた」といったような表現です。柔道に関して言えば盲学校以外の世界を知りません。だから、「井の中の蛙」だと思いました。こればかりはいくら口で「世の中にはまだまだ強い人はいるんだよ」とか「あな

たと同じくらいの歳の人でも、もっともっと強い人はた~~~~~くさんいるんだよ」と言っても実感できるものではありません。もっと他の世界を感じてほしいな、と思いました。

対外的な試合に出てほしいのは山々だったのですが、中体連関係の試合は盲学校からは参加することができない規定になっていました。学校として一般の試合に出られるのは、高校生からだということをお聞きしがっかりしました。また、視覚障害者の試合も、高等部に入ってからでないといけないことも分かりました。現段階で、たくさんの方ができる試合に参加するためには“道場入り”を考慮しなければならないということでした。

そんなこともあって、折に触れてお母さんに「道場に通ってみるってどうですかねー」ともちかけてみました。家に帰ったあとの過ごし方はずっと課題意識を持っておられたお母さんは、道場のことも考えたいと思ってはいたものの、「なかなかねー、忙しくて…」と踏み出しきれない思いも持ってらっしゃったようです。「毎日の生活を送るのが精一杯で、できるのかどうか不安だった」と当時のことを振り返ってらっしゃいました。

ちょうどそのころ、平成16年度から、広島市で重度盲ろう者通訳介助制度が始まりました。この、「道場へ通わせる」「試合に出させる」ことに絡めて通訳制度利用を考えるきっかけにならないかなとも思いました。それで、そのこともあわせて話を振っていきました。

しばらくは大きな動きはなかったのですが、中1の秋、お母さんが決心をされたようでした。

「どこか通えそうなところに道場がありませんか？」

そこで以前から話に上っていた野坂道場を、藤田教頭先生からあらためて紹介していただきました。

一番最初に体験入会したときは、ペースの違いにかなりとまどっていました。学校で練習するときは他に誰もいないのですから自分のペースです。1対1ですから、先生も本人の様子を見ながらあわせて練習をします。

ところが、道場ではぱっぱっぱっと練習が進みます。そのテンポの速さったら、ちょっと説明をしていたらその練習はあっという間に終わりです。「だいじょうぶかなあ…」というのが正直な印象です。

でも、本人はものすごく充実した時間だったようで「ぜひ入りたい！ここで練習したい！」と意欲満々でした。

お母さんは少し不安そうな顔になりながらも、「まあちょっとずつ…」と結局入会を決められました。いったん入ると決められたらお母さんの協力はすごいものでした。練習につきあうだけでなく、その日に注意されたことを家に帰ってからも復習して練習につきあたりされていました。

彼は情報が入りにくい分、ただひたすらにがんばって練習します。一つ一つの技を教わるのに時間はかかりますが、少しずつ強くなっていきます。

話は変わりますが、本校のクラブ活動は、1月～12月を活動期間としています。入学当初は、その時に開設されているクラブに入るしかありません。そのため、彼はスポーツクラブに所属していました。

12月、次期クラブ活動を検討する際、彼は自分で柔道クラブを立ち上げました。立ち上げるためには、部員が最低3人は必要です。しかし、同じ中学部にはいっしょにしてくれそうな人はいません。部員を集めるため、普段行ったことがない高等部普通科、理療科にまで行き、勧誘をしました。なんとか3人を確保し、柔道クラブを設立することができました。発起人ですから当然部長です。部長として、大勢の生徒の前で話をするなど、これまで避けてきたことも積極的に行うようになりました。

そして2月。とうとう初めての対外的な試合に、道場から出ることになりました。こんなに早くに出させてもらえるなんて...とびっくりです。とにかく黙々と練習する彼は、道場の先生方にもかわいがっていただいていたようです。

最初の試合は、ものすごく緊張していました。一般の試合ですが、試合の開始時だけ、盲人柔道と同じく「組んでから」「背中を両者にたたいて合図する」方法をお願いしました。話が少しひろまったのか、「ちょいとみてやろう」というような審判のギャラリーも何人かいました。「結構強い...」と驚きの声もちらほら聞かれました。

それから何度も試合に出場してきました。そんな中で、以前試合したことのある生徒と、再度試合することもあります。すると相手の生徒のほうが覚えているもので、審判が試合開始の方法を忘れて普通に始めようとしたところを、相手がストップをかけて審判に教えてあげるという場面もありました。

出場回数を重ねるにつれて、試合の世話をしてくれる高校生たちや他の中学生たちもだんだん彼のことを認識していきます。トーナメントの時には気にかけてくれ、通訳をしている私に「次呼ばれますよ」と教えてくれたりします。少しずつ彼のことが浸透していていることを感じます。

道場の選手として、団体戦に出場したこともあります。いっしょに出た子たちは、準備体操、試合場への出方、試合での礼のタイミングなど、彼が何ができて何が難しいか、日頃いっしょに練習をしているなかで感じ取り、自分たちのやり方で上手にサポートしてくれます。

試合の様子を見て同じ道場の生徒が「彼は勘がいいから。～～という技を覚えたらいいと思うよ」と私たちに教えてくれます。彼が認められていっていることを感じます。それを彼本人に伝えると、嬉しそうにしていました。

練習中、様々な指示や様子を、道場の仲間が手話ではないけど自分たちで編み出したサインで彼に伝えます。彼はそれを理解して周りと同じような行動を取ります。

そうかと思えば、彼を疎ましく思う人もいます。練習中、誰かと組まなければならないのに一人取り残されたとき、涙をこぼすこともありました。

いろんな人がいる、それを実感しています。まわりに自分のことを知ってもらっている、そうではない人もいるかもしれないけど、自分のことを認めている人がいる、それが彼の大きな自信につながっているように思います。

2年生になったとき、またひとつの転機がやってきました。

本校に、三木先生という柔道の世界ですばらしい活躍をされている先生が転勤してこられたのです。

「視覚障害者に柔道を教えるのが夢だった」とおっしゃられる三木先生は、授業をやりくりして週1時間のK君の柔道の時間にいっしょに入ってくださいるようになりました。K君一人に体育の先生が二人もついてくれるというなんとも贅沢な授業でした。

いつも出ている試合にも、三木先生は審判員として来られています。試合の様子をいつも見守ってくださり、試合のその場でアドバイスをしてくれました。

試合のときには、

「いつかは通訳制度を使って、公的な通訳の人をつけてもらいましょうね」と機会があるたびにお母さんをお願いしてきました。これもまたふみきるには期間が必要だったようですが、9月に行われたある小さな大会で、試してみることになりました。

初めて「いつもいっしょにいる人ではない通訳者」です。本人もですが、お母さんも私もときどきでした。

このときに派遣された方がどうも手話があまりお得意ではない方だったので、ちょっと難しかった場面がたくさんありました。「通訳をお願いするときは、しっかり“手話”のところを強調しましょうね」と次回からの反省でした。それ以来、私が見る限りでは、試合には、ばりばりの手話通訳者がついてくださっています。

ではここで、NHKでは全国放送で流れたものでもありますが、中四国地方のニュース番組で放映された特集をご覧ください。(VTR放映)

いつも前向きにがんばっているかのようですが、そればかりでもありません。

12月、クラブ改編期が再びやってきたとき、彼は「スポーツクラブに変わりたい」と言ってきました。いろいろ理由は言ってきました。「柔道が強くなるために体を鍛えるんだ」と言ってみたり、「部長として声に出して話をするのが嫌だ」と言ってみたり…。それらも理由のひとつだと思います。それから多分「しんどのいはいやだ」というのも理由のひとつです。

しかし、おそらく一番の理由は「クラスメイトと同じクラブになりたい」だったと思います。2年生になったときに、転入生があり、彼のクラスの生徒は3人になりました。この転入生、T君はK君にとってとても大きな存在となっていきます。

始めは会話もなにも成立しませんでした。でも、同じクラスメイトの女の子と手話や指文字を駆使して話している様子が気になったのでしょうか。自分でも手話や指文字を覚えていきました。とりたてて指導はしていません。ただ「これどうやってやるん？」と聞かれた時に答えていただけです。でも、ものすごい勢いで覚えていきました。

T君は、K君以上に元気です。昼休憩ともなると体育館に走って行って、みんなでバスケットボール大会です。大きなバランスボールひとつをめぐって、みんなが走り回り奪い合い...それはもう息絶え絶えになってしまいます。私も何度青あざを作ったかしれません。そんな彼に一種の憧れのようなものも持つようになったんじゃないかなと思います。とにかくK君はT君が大好きです。

T君もまた、K君に大きな影響を受けています。T君は何度もK君の試合の応援に来てくれます。試合場でのK君の姿に何かを感じたのでしょうか、2学期から「柔道クラブとかけもちしたい」と言い始め、練習を始めました。三木先生の勧めで、彼もまた別のところではありますが道場に通い始めました。いつかは試合に出てK君と試合することが目下の夢です。

いろいろ話をしているうちに、「柔道クラブをやめたい」ではなくて、「部長をやめたい」に変わってきました。お母さんともいろいろお話し合いされたようで「じゃあT君に部長を変わるようお願いしてみたら」というアドバイスをお母さんからもらったようです。いったんはそれで話が進んでいたようでした。

でも、三木先生から「近頃のあなたの様子からは“やる気”が感じられない」「やりたい。強くなりたい。という気持ちを感じられないのに、教えることはできない」「柔道やる、クラブを立ち上げた人として、しっかりとみんなを引っ張っていく気持ちをもってもらいたい」などゆっくりとお話すると、「やっぱり自分がします」と言い始めました。実はこのとき、NHKテレビの取材が入っていたんです。この話をしていたときにテレビカメラが回っていました。放映はされませんでした。裏話でした。

今年の5月にも強化合宿が行われました。場所は東京です。12月のときとはひと味様子が違ったようです。いっしょに行った先生からも「うん！今回はよくがんばっていたよ！」と言われました。本人もそれは自覚しているようです。日記に書いていました。

「強い人から逃げないという気持ちになれたのが嬉しかった」

いつも、しんどいことや強そうな人からは逃げたいという気持ちがあることを指摘されていたので、そうではなかった一面を自覚できたことが嬉しかったのだと思います。その日記を読んだときに、またひとつ成長を見つけたような気がして嬉しかったです。

6月には、いつも出ている月次(つきなみ)という定例の試合で、初めて優勝をしました。試合の翌日、誇らしげに賞状を見せてくれました。とても大きな自信となったようです。

そして、つい先日の試合では1級の部で出場しました。やはり強い人ばかりです。また、人数も多いです。みんな黒帯を取るためにエントリーしているので、人数もこれまでの比じゃありません。あっさりとして2敗しました。「おまえは何も考えとらん！」三木先生にその場で大怒られです。「勝てとったかもしれん試合だったのに。お前に“勝とう”という気持ちが全く出ていなかった。」

テレビで彼のがんばっている様子が放映されたことからの反響は大きかったです。学校には何通もの応援メールが寄せられました。全く知らない人からそんなふうにも送られるのはなんとも不思議な感じでした。

また、行事で交流のある学校の生徒さんからも「テレビ見ましたよ」と声をかけられることも少なくありません。特に女の子に囲まれてそんなふうにも声をかけられると、K君の顔はすっかりでれでれになっていました。主役ではない私ですら「見ましたよ！」と声をかけられることがしばしばあるんです。テレビの影響力ってすごいなあと思いました。

また、びっくりしたのは、柔道のあの古賀俊彦さんから直々に励ましのお手紙をいただいたことです。ビデオで、先日の優勝の賞状と古賀稔彦さんからのお手紙をみていただきながら、そのお手紙を紹介します。

K(手紙は実名)選手様

君の一生懸命な柔道姿を拝見し、お手紙します。

柔道は「柔らの道」終わること無い一生歩いていく道。転んだりないたり、笑ったり、感動したり。多くの仲間を作ったり。柔道からたくさんのお話を学べます。まさに人生の教科書です。

これからも共にがんばっていきましょう。

古賀稔彦

お手紙と、いっしょに贈られた服は彼の自慢です。舎で同室の子に何度も自慢していたようです。その子からは「Kはカッコいいカッコいいと自慢するけど、俺としては別にそう思わん」とあっさりかわされていましたが。

周りへの影響はクラスメイトだけではありませんでした。T君と同じ時期に転入してきた一つ上の先輩。彼女にも強い印象を与えたようです。彼女が広島県立盲学校から代表として参加した中国四国盲学校弁論大会で発表した原稿の一部を紹介します。

「私の中学時代の思い出」

～略～

もし、私が盲学校に転校してきていなかったら、ずっと家にこもっていて、人に会うのがもっとこわくて

外に出られなくなっているかもしれません。

盲学校の教育相談を受けて私はもう、いじめられる心配はないんだと、安心しました。今の私は、少しだけ人が怖いという恐怖心がまだ残ってはいます。ですが今は盲学校にいる生徒全員と話したりするのが楽しみになってきました。

今こうなれたのは先生方と皆さんのおかげです。

特に1番影響を受けたのはK君です。K君は目が見えないということだけではなく耳も聞こえない「盲ろう者」であるということを知ったとき、K君の明るさにとてもびっくりしました。自分の障害に負けないで柔道と勉強をがんばっている姿を見ると、私もK君を見習わないといけなかったと思います。そして今、中学部に転校して1年がたち高等部に入学しました。今の私はいろいろな発見ができて性格がすごく明るくなれたと思います。

～ 後略～

こうやって、いろんな人とつながって、彼の柔道の道は開かれてきました。これからも続いて行くものと思います。これからもつながりを広げていけるように、私たちにできることをお手伝いしていきたいと思います。

